

## すきこそものの上手なれ

公益社団法人埼玉県診療放射線技師会  
会長 田中 宏



私が20代前半のころ、福島県のあだたら高原スキー場で、冬のシーズンだけスキーのインストラクターをしていたことがあった。

1987年に『私をスキーに連れてって』という映画が公開された。キャストは原田知世、三上博史など、主題歌は松任谷由実の『サーフ天国、スキー天国』、コテコテのバブル時代の映画であった。当時の若者は皆スキーを趣味とし、週末は高速道路渋滞が慢性化した。私ももれなくその一人であった。当時は“スキーが上手であれば女性にモテる”と信じ、スキー連盟まで所属し、毎週のようにトレーニングのため東北自動車道を北へ車を走らせた。

そして、念願のスキーインストラクターになったが、思っていたより地味な仕事であった。特に、中高生のスキー教室は一度に多数のインストラクターが必要になり、本業で酪農を営む方などは、朝早く牛の乳搾りを行い、それからスキー場に出勤する人も多かった。

私は同年代の女子をインストラクターとして受け持つことを夢見てきたが、現実はそんなに甘くなく、下は幼稚園児、上は高校生のスキー教室を受け持つことが多かった。初めて受け持った生徒は高校生のスキー教室であった。1人のインストラクターで10人の生徒を受け持った。初日の午後2時間の授業で生徒の技量を見極め、1人を上級のクラスへ、1人を初心者クラスへ異動した。3日間とい

う限られたレッスンで少しでも上達してほしいという思いからだ。その時は最善の判断と思っていた。

しかし、それは大きな間違いであった。3日間全てのカリキュラムが終了し閉校式の後、異動した2人の生徒が僕のところへ来た。

「どうだ、うまくなったか？」

生徒たちに聞くと生徒たちはこう切り返した。

「僕は最後まで先生のクラスで滑りたかったスヨ！」

私は自分の間違いに気が付いた。生徒たちが今回のスキー教室に来ているのは、何もスキーの選手になるわけではなく、インストラクターになるわけではない。学校行事の思い出を作っているにすぎないのだ。あれから25年がたち、スキー教室は彼らの人生でほんの一瞬のことで、覚えていないと思うが、私たちインストラクターの役割は「良き思い出を作るお手伝い」と気付かされた。もちろん、それ以来クラス替えをしたことはない。

スキーを教えるということと、仕事を教えるということは同じ土俵で論じることはできない。

教え方として星一徹バリエーションを否定もしないし、最近「キビシイ」というテレビ番組が話題になっている。これはこれでアリだと思うが、共通していえることは「楽しさを教えること」、つまり指導者が楽しそうに教えなければ、教えてもらっている人も楽しくはならないのではないだろうか。